

三康文化研究所

研究員

オススメ本コーナー

祝

増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録

このたびは日本国政府より、題名通り、今より浄土宗と大本山増上寺が提出していただきました「増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録」が、ユネスコ「世界の記憶」に国際登録されました。これは、仏教の歴史と文化を認めた証しであるとともに、今世紀における仏教の歴史のひとつの到達点ともいえることであります。

この「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典書」とは、大本山増上寺がその歴史とともに護り続けてきた什物であり、

①中国、南宋時代（12世紀）に開版（版木が作成）された思溪版大蔵経 5,342 帖
②日本、室町時代（15世紀）に開版された普賢寺版大蔵経 5,228 帖
③朝鮮、高麗時代（13世紀）に開版された高麗版大蔵経 1,357 冊

という三種の木版大蔵経（三大蔵）のことです。

三大蔵の詳細な内容は、思溪版大蔵経（宋版）・普賢寺版大蔵経（元版）・高麗版大蔵経（高麗版）の全仏典名および著訳者名や紙数などを記載した『増上寺史料集』（請求記号：188.461-1-9）別巻（日録本文 1184 頁および索引 42 頁、東京・増上寺、1981 年）（請求記号：188.461-B1・B2）に記載されています。また国内外における大蔵経研究において、特に、

『大蔵経一成立と変遷』（京都・白華堂、1964 年）

竺沙雅章『増上寺の歴史』（京都・大谷大学、1993 年）

『増上寺の歴史—中国・高麗篇—』（東京・立正大学情報メディアセンター）

高橋正和『大蔵経の歴史—成り立ちと伝承—』（京都・方丈堂出版、2019 年）

『大蔵経一成立と変遷—』（京都・法蔵館、2020 年）

第 14 回 研究員のオススメ本紹介コーナー

〈増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録〉

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究指導員はこちら！



柴田 泰山（しばた たいせん）

専門分野：中国仏教、浄土宗学

第 1 回公開講座では『浄土宗名義の教学研究序説』の題目で講演されました。

今回は特別に、「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典書」のユネスコ「世界の記憶」登録決定（4 月 18 日付）に関連して、大蔵経のオススメ本をご紹介します。

「増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録」 世界の記憶について

ユネスコが世界的に重要な記録物を保護し、広く公開することを目的として 1992 年に開始した事業。

具体的には、危機に瀕した歴史的記録物（古文書や書物）を国際登録や地域登録を通じて保存・活用する活動。

登録にかかる審査は 2 年に 1 回。1 か国からの申請は 2 件以内。

文部科学省 HP（https://www.mext.go.jp/sitemap/006/1354664_kconf.html）参照。（最終閲覧日：2025.05.09）
*「大蔵経」の説明は 2025 年度 5 月地域資料展示説明文を参照。





増上寺三大蔵のユネスコ「世界の記憶」国際登録

このたび日本国政府および関係省庁、および浄土宗と大本山増上寺が提出していただきました「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典叢書」が、ユネスコ「世界の記憶」に国際登録されました。これは世界が仏教の歴史と文化を認めた証しであるとともに、今世紀における仏教の歴史のひとつの到達点とも言い得ることでもあります。

この「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典叢書」とは、大本山増上寺がその歴史とともに護り続けてきた什物であり、

①中国、南宋時代（12 世紀）に開版（版木が作成）された思溪版大蔵経 5,342 帖

②中国、元時代（13 世紀）に開版された普寧寺版大蔵経 5,228 帖

③朝鮮、高麗時代（13 世紀）に開版された高麗版大蔵経 1,357 冊

という三種の木版大蔵経（三大蔵）のことです。

三大蔵の詳細な内容は、思溪版大蔵経（宋版）・普寧寺版大蔵経（元版）・高麗版大蔵経（高麗版）の全仏典名および著訳者名や紙数などを記載した『増上寺史料集』（請求記号：188.461-1-9)別巻（目録本文 1184 頁および索引 42 頁、東京・増上寺、1981 年）（請求記号：188.461-B1・B2)に記載されています。また国内外における大蔵経研究において、特に、

『大蔵経一成立と変遷一』（京都・百華苑、1964 年）

竺沙雅章『漢訳大蔵経の歴史一写経から刊経へ一』（京都・大谷大学、1993 年）

野沢佳美『印刷漢文大蔵経の歴史一中国・高麗篇一』（東京・立正大学情報メディアセンター、2015 年）

宮崎展昌『大蔵経の歴史一成り立ちと伝承一』（京都・方丈堂出版、2019 年）

『新編 大蔵経一成立と変遷一』（京都・法蔵館、2020 年）

などで大蔵經全般に関する研究の一環として増上寺所蔵の三大蔵について言及が行われています。あるいは椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』（東京・大東出版社、1993 年）、竺沙雅章『宋元仏教文化史研究』（東京・汲古書院、2000 年）（請求記号：182.35-C44）、馬場久幸『日韓交流と高麗版大蔵經』（京都・法蔵館、2016 年）（請求記号：183.02-B12）などにおいて、各版大蔵經に関する研究が行われています。仏教研究における大蔵經そのものの意義付けについては下田正弘『仏教とエクリチュール—大乘經典の起源と形成—』（東京・東京大学出版会、2020 年）で、あるいはデジタル・ヒューマニティーズにおける大蔵經の存在意義などについては下田正弘・永崎研宣編『デジタル学術空間の作り方—仏教学から提起する次世代人文学のモデル—』（東京・文学通信、2019 年）において言及されています。

また尾崎康『正史宋元版の研究』（東京・汲古書院、1989 年）では、思溪版大蔵經に存在する刻工名により、従来、嘉祐年間（1056 年～1063 年）刊とされてきた『唐書』が実際には南宋初期の刊行であることが明らかにされています。増上寺所蔵の三大蔵には版本作製現場における刻工者名が記載されており、すでに野沢佳美が「宋版大蔵經と刻工—附・宋版三大蔵經刻工一覧（稿）—」（『立正大学文学部論叢』110 所収、1999 年）（請求記号：2L-19-1）や「元版大蔵經と刻工—附・磧砂蔵および普寧寺蔵刻工一覧（稿）—」（『立正大学文学部論叢』112 所収、2000 年）（請求記号：2L-19-1）などにおいて詳細な報告を行っているように、刻工者名を通じて宋代および元代そして高麗時代における印刷技術と活字文化の具体像を知ることができます。

既に電子化され Web 上で全世界に向け公開されている増上寺三大蔵は今後、国際的に漢字文化や東アジアの印刷文化を広く紹介するとともに、漢字文化の意義と未来を全世界に紹介していくことでしょう。

（柴田泰山）